富山大学教養部紀要（人文・社会科学篇），25(1)：183—202，1992

『マルテの手記』を読む
—擬人・擬物の視点から—

宮 内 伸 子

Eine Untersuchung zur Darstellung und Funktion von "Vermenschlichung" und "Verdinglichung" im Rilkes Roman "Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge"

Nobuko MIYAUCHI

I．擬人法・擬物法による世界像

リルケの散文作品『マルテの手記』は，そのテーマとしては，愛・不安・都会・女性・死等を挙げることができるだろう。本稿では，このようなテーマがどのようにことばに裏打ちされているのかを考えてみたい。

小説や詩といった言語による作品と触れ合う場合，私たちが直接に接するのはそのテーマではなく，そこに連なることばであるのはいうまでもない。そのことばの集合体から私たちはテーマを汲みとるのである。その際に，ことばの意味内容ばかりでなく，ことばの姿かたちもまた，テーマの伝達において重要な役割を果たしているにちがいない。

さて，擬人法とは，今さら説明するまでもないだろうが，モノをヒトに見立て，モノの行為や在り方を，あたかもヒトのそれであるかのように表現するレトリックである。擬物法というのは擬人法ほど一般的ではないが，ちょうど擬人法の反対と考えてよく，ヒトをモノに見立て，ヒトの行為や在り方を，あたかもモノのそれであるかのように表現する修辞技法である。

擬人法・擬物法のレトリックの前提としては，人間の観念の中でのモノとヒトとの峻別を挙げないわけにはいかない。もし私たちが両者の間にはっきりとした区別をつけていないのなら，モノをヒトに見立てても，またその逆でも，たいした表現効果はないからである。そこで，モノとヒトのちがいを私たちは何に見ているのか，という点から考えていくことにしよう。私たちがその両者の間を何でもって隔てて境界線を引いているのかという問題である。

ヒトは自らを「万物の霊長」と位置づけているが，この根拠は何なのだろう。いったい，

モノと比べてどういう点でヒトは自分が優位に立っていると考えているのだろうか。こういう場合，ヒトの身体に注目するとうまくいかない。ヒトはそれほど速く走れるわけでもないし，重い物を持ち上げることもできない。鳥のように飛ぶこともできない。またヒトの身体をバラバラにして，胴体，手足，内臓各部というふうに考えていくと，いつのまにか手術で除去したり，さらには最近では移植も可能な「モノ」の領域に踏み込んでしまい，これまた具合が悪いことになる。従って，そういうとき考えるべきヒトの特徴とは，ヒトが他の存在物に対して誇示できるほぼ唯一のものである脳という臓器の働き，すなわち精神活動だけということになりそうである。

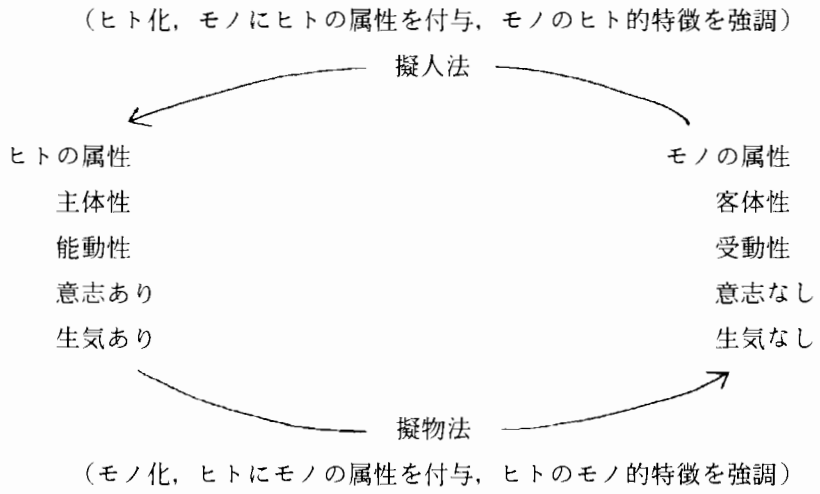
私たちはこの精神活動の有無ということを，モノとヒトとを分けるポイントにしているように思われる。そしてその精神の属性は，自由な活動というところにあるのではないだろうか。その結果ヒトの特徴としては，自由に精神を働かせ，自分の意志を持ち，それに従って行動するということが出てくるだろう。これらが近代人の理念にすぎないとしても(＊1)，自らの人間性を強調したいとき人間はこのような点を挙げるというだけでここでは十分である。モノにはこのようなことを誰も要求しない。モノは動かないか，動くとしてもヒトの意のままに動かなくてはいけない。そのようないわば「従順な」モノが理想のモノである(＊2)。モノの属性は端的にいえば，その受動性にあるだろう。

モノとヒトの特徴が明らかになったところで，擬人法・擬物法という修辞技法がどんな効果を持つのかという問題に進むことにしよう。まず，瀬戸賢一著『レトリックの知』における擬人法の説明を紹介しておきたい。そこでは，擬人法は「《生気づけ》の現象」として位置づけられている。同書の説明をもとに図表化してみると図1のようになる(＊3)。なお，図2は，ヒトとモノそれぞれの属性を中心にすえて擬人法・擬物法の説明を筆者(宮内)が試みたものである。

(図1)

		擬人法	擬物法
ヒト	人間	↑ ヒト化	↓ 生きモノ化
生きモノ	動物 植物 無生物（物体）	↑ 生きモノ化	↓ モノ化
モノ	抽象物	↑ モノ化	↓ コト化
コト	出来事		

（図２）



瀬戸は《生気づけ》の現象を，「コトをモノ化し，モノを（生きモノ化し，生きモノを）ヒト化することである」と説明して，「いわば拡大擬人法である」といっている（＊4）。コト（出来事）というのは，引き起こされたものである。引き起こされたことを出来事という。すなわち出来事は受動一方である。出来事には意志はない。それは誰か，あるいは何か，いずれにせよ他者によって引き起こされるばかりである。逆にヒトは行為の主体である。ヒトは物事を引き起こす。能動の主である（＊5）。人間は自らの意志に従って行動するとき，まさに人間らしいのである。人間のことばの体系から見て，人間の行為にかなった行為なのである。モノはコトとヒトとの間に位置する。モノの中でも生きモノとなるとかなりの能動行為が可能である。これはいい換えれば私たちの言語が，生きモノに対してはかなりの能動行為を表す語彙を用意しているということである。

擬物法については，『レトリックの知』では擬人法の逆であるが擬物法の方はずっと使用頻度が低いということしか述べられていない。それはこの著作が主に日常言語を扱っているためであろう。小説や詩となると擬物法も無視できない修辞技法である。『マルテの手記』ではそれが特に活用されているように思われるのだ。

擬物法は《生気づけ》の逆であるから，《生気抜き》といっていいだろう。図１に示したように，ヒトを（生きモノ化し，生きモノを）モノ化し，モノをコト化することである。生気を抜き，意志を剝奪する方向への動きである。意志を完全に無視された人間は，生物学的にはヒトであってももはや私たちのことばの体系においては人間ではない。

始めにも触れたが，擬人法・擬物法が効果を持つためにはその背景としてモノとヒトとの標準分類とでもいうものが，そして，両者のために別々に用語が準備されていることが必要である。標準があるからこそ，そこからの「ずれ」として表現効果が出てくるのである。

しかし，ここで思い出さなければいけないのは，表現する側は，読み手に与える表現効果だけを考えてさまざまな修辞技法を駆使しているのではないという点である。世界はいつも標準的なことばの体系通りの姿で人間の前に現れるわけではない。また，同じものに接しても人それぞれ多かれ少なかれちがう受けとり方をするものである。さらには同一人であっても時と場合，その時の気分，状況によって異なる感じ方をする。印象が異なれば当然その表現も変わってくるだろう。標準分類に従った表現で事足りなくなる場合が出てくるはずである。あるモノの様子を表現するのに，ふつうは専らヒトにしか使わない語彙を用いた方が，それにピッタリすることがある。逆にあるヒトについて述べるのに，モノに見立てた方がしっくりするという場合も出てくる。擬人法・擬物法ばかりでなくすべての修辞技法はこのような最適の表現を求める努力の結果であると考えなければ，修辞は単なるお飾りになってしまう。カール・ルートヴィヒ・シュナイダーは，表現主義詩人の比喩表現を扱った論文『ゲオルク・ハイム，ゲオルク・トラークル，エルンスト・シュタードラーの作品における形象的表現』の中で，次のように述べている。「伝統的レトリックによる文体論では比喩は単に飾りという扱いで，ふつうのいい方の置き換えにすぎなかった。だが実は人間の認識自体がすでに比喩的なのである。ふつうの表現では名ざされ指示されるだけの事柄を，比喩は感情や気分を含めて直接的に表現可能にするところにその決定的な意味がある。比喩は作者の世界認識を含むものなのである」(＊6)。また彼は，表現主義の比喩をバロックのそれと対比させ，バロックの比喩は法則にのっとって作られているが，表現主義のそれは主観的・個人的であるとも述べている(＊7)。

1910年に発表された『マルテの手記』は表現主義の先駆的作品と位置づけられることもある。K・L・シュナイダーが指摘した表現主義の比喩の特徴を『マルテの手記』もだいぶ共有しているようである。『マルテの手記』の場合も，そのような比喩表現から手記の書き手マルテ，ひいては作者リルケの目に映った世界を探れるのではないだろうか。その際，特に擬人法と擬物法がテーマと密接に結びついて，テーマの伝達に大いに寄与しているように思われるのである。

Ⅱ．ヒトがモノになるとき・モノがヒトになるとき

次に，具体的に作品に即して，どんな場合に擬人法・擬物法が使われて，モノがヒトになり，ヒトがモノになっているかをそのテーマと絡めつつ見ていきたい。

1．死

死（Tod）は『マルテの手記』の主要なテーマの一つである。死は古来，死神として擬人化(＊8）され，人間の抵抗かなわない強大な力を持つ存在として扱われることが珍しくない。

『マルテの手記』では死はどのように描かれているのだろうか。

断章第8はその前々章から始まった「死」のテーマを引き継いで，マルテの父方の祖父であるクリストフ・デトレフ・ブリッゲの死の様子が中心になっている。ここでは死はまず，

Früher wußte man (oder vielleicht man ahnte es), daß man den Tod in sich hatte wie die Frucht den Kern. (S.715)

というように，果実が種を持つがごとく人が身の内にかかえているものとして表現される。すなわち，「死」という生の終了を表す，いい換えればある段階から次の段階への移行を表現する抽象名詞が，持ったりかかえたりが可能な具体物として扱われる。その何行か後では，

Das lange, alte Herrenhaus war zu klein für diesen Tod, (S.715)

となる。こうなると，「死」の具体物化はいっそう明らかである。何となれば，抽象物は大きさを持たないものであるから，本来なら「死」にとって家が狭すぎるなどということはありえないからである。従って「死」は，図1によれば「生気づけ」の段階を一段階ヒトの方へと上っている。この「死」は生気づけの段階をさらに上る。

Christoph Detlevs Tod lebte nun schon seit vielen, vielen Tagen auf Ulsgaard und redete mit allen und verlangte. (S.718)

あるいは，

Christoph Detlevs Tod, der auf Ulsgaard wohnte, ließ sich nicht drängen. Er war für zehn Wochen gekommen, und die blieb er. Und während dieser Zeit war er mehr Herr, als Christoph Detlev Brigge es je gewesen war, er war wie ein König, den man den Schrecklichen nennt, später und immer. (S.720)

「死」は生きモノ化され，さらにはヒト化されている。これらは狭い意味においても擬人表現であり，「死」は完全にヒトの一種として振る舞っている。「死」は生の終わりという単なる出来事ではなく，それ自身意志を持って，周囲の人間たちをも振り回す暴君的な存在にまでなる。この「死」のヒト化の一方で，死にゆく人間であるクリストフ・デトレフの方は，部屋のまん中の

der große, dunkelnde Haufen (S.718)

と化し，

sie (=die Diener) wünschten, daß das nichts mehr wäre als ein großer Anzug über einem verdorbenen Ding. (S.718)

とされるに至る。ヒトのモノ化である。クリストフ・デトレフは今やただ横たわる腐りかけた塊にすぎない。「死」に襲われた人間は，生気を抜かれモノと化すので，モノとして描かれるのだ。そしてモノとして扱われる。死体はもはや自らの意志を持ち得ず，受動態でしか行為不能な存在である。すなわち死体には認知し，行動する力はもうない。それは

他者によって発見されるのを待つだけの存在である。

断章第55に，戦いで行方不明になったシャルル公を家来たちが探しに行く場面がある。シャルル公は死体で発見される。死体の顔は次のように描写される。

Aber das Gesicht war eingefroren, und da man es aus dem Eis herauszerrte, schälte sich die eine Wange dünn und spröde ab, und es zeigte sich, daβ die andere von Hunden oder Wölfen herausgerissen war; und das Ganze war von einer groβen Wunde gespalten, die am Ohr begann, so daβ von einem Gesicht keine Rede sein konnte. (S.889)

死体は水につかってうつぶせの姿勢で凍りついている。もちろんシャルル公は自力で顔を上げることはもはやできない。誰かがその顔を氷から引きはがすと，片頬がペロリとむけてしまう。そしてもう一方の頬は犬か狼にかみ取られているのだ。シャルル公は人間を相手にした戦いに敗れた後，自然の中で自らの身体性を無残にさらしているのである。「無残に」というのは人間中心的にすぎる感想かもしれない。なぜなら水はシャルル公が憎くて頬を凍りつかせたのではないし，犬や狼がかみ取ったのも，それが肉だったからにすぎないのだから。死体は人間の身体的側面，すなわちモノ的在り方の部分を露わにする。シャルル公の死体が氷づけの魚か肉のような書き方をされているのは，この点から何の不思議もない。

断章第47に描かれる市電の中での少女の死のありさまにも，同じことがうかがわれる。同行していた母親は娘の死を信じようとせず，死んだ娘の口に何か液体を注ぎ込んだり，額に何か塗りつけたり，力いっぱい頬を叩いてみたりする。

sie (=die Mutter) zerrte und zog das Ganze wie eine Puppe hin und her, (S.859)

死体は人形の一種といえるかもしれない。ヒトの形をしたモノである。

以上，死を境に，ヒトがモノになる様子を見てみた。死の際には，「死」の方が能動体となり，死んでゆく人間は受け身一方のモノと化していく。そして死体は完全にモノである。こうして人間は意志を持たず，他からの働きかけを受けるだけの受動的存在となるのだが，あくまでも頑として存在するというモノの強みも同時に獲得するのである。

2．病気

次に，病気と病人について考えてみたい。病気も死と同じく，人間の身体的側面，すなわちヒトの中のモノ的側面を意識させる現象である。

断章第21は，ある舞踏病患者（Veitztänzer）について語っている。マルテは舞踏病の発作を，一人の人間の体を舞台にした，病気とその人間の意志との戦いととらえている。彼は，通りで出会った男の体内をある力が巡って外へととび出そうとねらっているのを見てとる。

Ich begriff, daβ dieses Hüpfen in seinem Körper herumirrte, daβ es versuchte, hier und da auszubrechen. (S.771)

男は必死に意志を集中させその力に打ち勝とうと，ステッキで自分の体を押さえつけるなどして努力する。その様子を見ているマルテは自分の意志の力も男に貸そうとする。意志が病気の力に勝っている間はその人間は踊り出さずにいられるのである。だがついに意志は力つき，病気の力がその男を圧倒してしまう。

Der Stock war fort, er spannte die Arme aus, als ob er auffliegen wollte, und es brach aus ihm aus wie eine Naturkraft und bog ihn vor und riβ ihn zurück und lieβ ihn nicken und neigen und schleuderte Tanzkraft aus ihm heraus unter die Menge. (S.774)

この舞踏病患者をそっと見守っていたマルテは，身体が精神を裏切る不安を目の当たりにするのである。

『マルテ』において繰り返し表れるモチーフの一つに，「身体の一部の自立」とでも名づけるべきものがある。

断章第18では，手（Hand）がその持ち主の意志とは異なる行為をするのではないかという不安が表明される。

Aber es wird ein Tag kommen, da meine Hand weit von mir sein wird, und wenn ich sie schreiben heiβen werde, wird sie Worte schreiben, die ich nicht meine. (S.756)

断章第29では，手が独立して動き回る。

ich erkannte vor allem meine eigene, ausgespreizte Hand, die sich ganz allein, ein biβchen wie ein Wassertier, da unten bewegte und den Grund untersuchte. (S.795)

マルテは始めは自分の手の，だが自分に属さないものであるかのようなその動きを，興味深げにいわば傍観している。だが，しばらくして不意に，今度は確かに自分の手ではない別の手が現れ，自律した動きをしているものの確かに自分の手である手の方へ向かってくるのに気づき恐怖に陥る。マルテは必死に自分の手に働きかけ，引っ込めさせる。その様子はあたかも他者への指示のようである。

Mit allem Recht, das ich auf sie (＝die Hand) hatte, hielt ich sie an und zog sie flach und langsam zurück, (S.795)

断章第55でも，手が独立した存在として述べられている。この章は剛勇シャルル公の死を扱った章であるが，まず彼の人となりが語られる。マルテは彼の手に注目する。

Es sind arg warme Hände, die sich immerfort kühlen möchten und sich unwillkürlich auf Kaltes legen, gespreizt, mit Luft zwischen allen Fingern. In diese Hände konnte das Blut hineinschieβen, wie es einem zu Kopf steigt, und geballt waren sie wirklich wie die Köpfe von Tollen, tobend von Einfällen. (S.885)

シャルル公においては，手が頭なのである。頭に血がのぼるように，手に血が流れ込む。頭がカッとするように，手がカッとするのである。頭をその人間の指令塔と見なすのは常識であるから，頭がカッとしてある行動に移っても違和感はないが，手がカッとしたあげくの行為といわれると異様に響く。シャルル公の場合さらにこの手が主体ではなく，主導

権を握っているのは，そこに流れ込む血なのである。上で引用した部分に続いて，彼の血のことが語られる。

Es gehörte unglaubliche Vorsicht dazu, mit diesem Blute zu leben. (S.885)

自らの体内の血が，あたかも独立した他者であるかのような書き方である。彼はこの他者とうまくやっていかなければならない。そのためにシャルル公は女を愛することも，ぶどう酒を飲むこともしない。

Er wagte nie eine Frau zu lieben, damit es (=das Blut) nicht eifersüchtig würde, und so reißend war es, daß Wein nie über seine Lippen kam; statt zu trinken, sänftigte ers mit Rosenmus. (S.885)

また，自分は興味のないダイヤや宝石などの品々をこの血のために彼は持ち歩く。

Für dieses Blut schleppte er alle die Dinge mit, auf die er nichts gab. (S.886)

それは自分の威厳を血に見せつけて納得させるためなのである。

Denn er wollte seinem Blut einreden, daß er Kaiser sei und nichts über ihm: damit es ihn fürchte. (S.886)

だが血は信じなかった。

Aber sein Blut glaubte ihm nicht, trotz solcher Beweise, es war ein mißtrauisches Blut. (S.886)

そしてシャルル公がスイス軍に敗れると，血はこの敗北者から外へ出ようと欲する。

Seither wußte sein Blut, daß es in einem Verlorenen war: und wollte heraus. (S.886)

シャルル公においては血は意志を持つ存在となっている。すなわち人格を与えられヒト扱いされている。血の方が主人であり，人間の方はこの血をなだめ，この血にかしずく下位の存在になっている。

3．仮面

仮面，仮装，演技，こういった一連のものもこの作品の大きなテーマに属する。

仮面は本当の顔に対置されるものである。ただし他者から見られるものである点においては両者に相違はない。顔という単語Gesichtには，見られるものという意味もある。ただし現実には対応物のないにもかかわらず見られたもの，すなわち幻影，幽霊，錯覚を指す場合が多いのであるが。

断章第4，第5でマルテは，「見ることを学んでいる」と記す。

Ich lerne sehen. (S.710)

Habe ich es schon gesagt? Ich lerne sehen. Ja, ich fange an. (S .711)

その結果彼には見る目ができかけ，ものが今までとはちがって見えてくる。例えば彼は，人間の数よりも顔の方がずっと多いことに気づく。

Daß es mir zum Beispiel niemals zum Bewußtsein gekommen ist, wieviel Gesichter es

giebt. Es giebt eine Menge Menschen, aber noch viel mehr Gesichter, denn jeder hat mehrere. (S.711)

顔（Gesicht）は見られるものの代表といっていいだろう(＊9)。私たちは自分には見えない顔を他者にさらして暮らしている。

断章第15では祖父ブラーヘ伯の屋敷での子供の頃の思い出が語られる。その一節に次のようにある。顔は時に仮面のように見えるのだ。

sein (＝Graf Brahes) Gesicht erschien größer als sonst, es war, als trüge er eine Maske. (S.734)

すっかり仮面となった顔についても語られる（断章第24)。マルテは断章第５では，顔を次々と取りかえる人たちもいると書いたが，こちらはもう替えられないマスクである。

Der Mouleur, an dem ich jeden Tag vorüberkomme, hat zwei Masken neben seiner Tür ausgehängt. Das Gesicht der jungen Ertränkten, das man in der Morgue abnahm, weil es schön war, weil es lächelte, weil es so täuschend lächelte, als wüßte es. Und darunter sein wissendes Gesicht. (S.778f.)

私たちがものを見るという場合，いったい何を見ているのだろうか。視野に入ってきたすべてを私たちは「見て」いるのではないだろう。網膜に映った像すべてを認識するわけではない。目を開いても，見るつもりのあるもの，見る用意のあるものしか私たちには見えないのではなかろうか。逆に，現実にはないものも，見るつもりがあればそこに見出されることがあるのだ。

Georg hatte ganz vergessen, daß das Haus nicht da war, und für uns alle war es in diesem Augenblick da. (S.838)

これはマルテが子供の頃，近所のシューリン家を訪問したときの出来事である（断章第42)。シューリン家の屋敷は実は数年前に火事に遭い母屋がないのである。ところがそのことをすっかり忘れていたマルテたちにとっては，母屋はあるのだ。錯覚とわかっている錯覚はない。それは後から気づくか，あるいは他人が錯覚だと指摘するのである。幻影にしても同じである。それを見たときは，それは幻ではない。幽霊も確かに見られるのである。

“Siehst du ihn?” herrschte er sie an. (...) Abelone erinnerte sich, daß sie ihn gesehen habe. (S.850)

これは断章第44からの引用である。マルテの母方の祖父ブラーヘ伯が娘のアベローネに回想録を口述筆記させている。その回想がある男の思い出のところにさしかかり，伯はこの男のことはこの男を見ない者にはわからないだろうと，アベローネにも彼を「見る」ことを強いるのだ。そして，彼女は見たと思った。

見えないものを現前させる，見えないものを見るのは，見る側の働きかけの問題である。これはモノにヒトを見出す，あるいは逆にヒトにモノを見出すのとも共通する心の働きではなかろうか。

ここで，視点を仮面をかぶる側，仮装する側のヒトの方へ移してみることにしよう。

断章第71には，マルテが子供時代，想像で何にでも変身して遊んだ話が記されている。想像による変身には仮面も仮装も不要で，単に自分がその気になればいいのであるけれども，それはきわめて主体的で人間の理念にかなった行為といえるだろう。この変身には演技もなく観客もいない。

断章第31のゾフィーの物語も同じく想像による変身の話であるが，もう少し手が込んでいる。というのもここには共演者がいるからだ。ここで起きていることは次のようにまとめられるだろう。ゾフィーという実体を持たない想像の人物を，演じることによって実体化させるマルテ。そしてそのマルテ演じるゾフィーをゾフィーとして認めるマルテと母。マルテの体はゾフィーに使われて，マルテはどこかに消えるしかない。「死」に占拠された祖父ブリッゲ老人の体と同じである。ちがうのは，ブリッゲ老人の方は否も応もなく占領されてしまったのに対し，マルテの方は自らの意志で自分の体をゾフィーに提供している点である。つまりマルテがマルテの意志でゾフィー役を演じているのである。共演者というより共犯者めいた母も，マルテがゾフィーを演じていることは承知なのである。

Wenn sie (=Maman) dann fragte, wer da wäre, so war ich glücklich, drauβen "Sophie" zu rufen, wobei ich meine kleine Stimme so zierlich machte, daβ sie mich in der Kehle kitzelte. Und wenn ich dann eintrat (in dem kleinen, mädchenhaften Hauskleid, das ich ohnehin trug, mit ganz hinaufgerollten Ärmeln), so war ich einfach Sophie, Mamans kleine Sophie, (S.800)

このマルテのゾフィーへの変身は，マルテと母，二人だけの共同の想像の世界での出来事である。

さて，仮面や仮装はヒトが他から見られるためにわざわざ為すものである。つまり仮面や仮装の下にはヒトの意志がある。仮面や仮装は自然にそこにあるという存在ではない。覆面や変装となると，ヒトの意志がさらに明らかである。

断章第32は仮装による変身がテーマとなっている。マルテはウルスゴールの屋敷の物入れに昔の衣服を発見し有頂天になる。面白がって取っかえ引っかえ着てみるうちに，次第にマルテは衣装の持つ力を感じ始めるようになる。

Ich lernte damals den Einfluβ kennen, der unmittelbar von einer bestimmten Tracht ausgehen kann. Kaum hatte ich einen dieser Anzüge angelegt, muβte ich mir eingestehen, daβ er mich in seine Macht bekam; daβ er mir meine Bewegungen, meinen Gesichtsausdruck, ja sogar meine Einfälle vorschrieb; (S.804)

衣服はヒトに着られるだけのおとなしい受け身のモノではないのだ。ただしこの時点ではまだマルテは変装を楽しんでいる。自分を確保しつつ衣服の持つ力を駆使して自信を持ってさまざまに大胆に変身を試みる。

Diese Verstellungnen gingen indessen nie so weit, daβ ich mich mir selber entfremdet

fühlte; im Gegenteil, je vielfältiger ich mich abwandelte, desto überzeugter wurde ich von mir selbst. (S.804)

ところがある日，それまで鍵が開かないと思っていた最後のたんすが開く。そこには，仮装舞踏会用の衣装や仮面が入っていた。マルテは早速それらを身につけてみる。顔にぴったりの仮面をつけ，布を何枚も何枚もターバン風に頭に巻き，巨大なマントをはおる。そして威厳をこめて鏡の前へと進む。満足のいく堂々とした姿である。しかしその時，何かの拍子で近くにあった細々とした物を載せた小さなテーブルがひっくり返り，それを機にマルテと仮装の立場が逆転してしまうのだ。テーブルの上の置き物やびんが割れて散らばり，マルテはあわてふためく。彼は身にまとった布類を急いではずそうとするのだが，衣装は却ってきつくまといつくばかりなので，マルテは鏡の前へ行き自分の手の動きを見ようとする。だが鏡が彼に見せつけたのはなじみのない異様な男の姿だった。マルテは圧倒されてしまう。彼は鏡の中の男を見つめ，その男と二人きりでいるのが恐ろしくなる。その時さらに恐ろしいことが起こる。

ich verlor allen Sinn, ich fiel einfach aus. Eine Sekunde lang hatte ich eine unbeschreibliche, wehe und vergebliche Sehnsucht nach mir, dann war nur noch er: es war nichts außer ihm. (S.808)

マルテは消滅してしまったのだ。マルテは恐怖から逃れようと駆け出すが，走るのはその男なのである。

Ich rannte davon, aber nun war er es, der rannte. (S.808)

仮装して変身をはかったのはマルテだったはずだ。彼は自分の意志で仮装したのだ。だが今や彼の体は見知らぬ男に占領されてしまった。マルテ自身，もう自分を自分と認められない。マルテは他者の担体（Träger）として意志のない体を提供しているにすぎなくなったのだ。マルテは最後には気を失って，まさにモノとして倒れてしまう。

(...), daß ich ohne Besinnung sei und dalag wie ein Stück in allen den Tüchern, rein wie ein Stück. (S.809)

仮装や変装をしていた主体が，何かの拍子に自分が仮装・変装して扮していた対象と主客が逆転してしまい，主体だったヒトがその扮装の担体というモノになってしまう恐怖は，断章第54でも描かれている。その章ではロシアの偽皇帝グリーシャ・オトレピョフの最後が語られる。グリーシャはまんまと皇帝になりすまし，皇帝の生母を呼び寄せるに際しても絶対見破られない自信があったらしいのだが，実際に皇太后に息子だと認められると，その時からグリーシャの自信は揺らぎ始めたのではないかと，マルテは考える。皇帝を騙るというグリーシャ自身の意志的行為が，つまり仮装や演技の一種であったものが，周囲からお前は当の皇帝本人であると認められることにより，グリーシャ自身は消滅の危機に陥ったのである。彼の主体性は骨抜きになってしまった。

Aber die Erklärung der Mutter hatte, selbst als bewußter Betrug, noch die Macht, ihn

zu verringern; sie hob ihn aus der Fülle seiner Erfindung; sie beschränkte ihn auf ein müdes Nachahmen; sie setzte ihn auf den Einzelnen herab, der er nicht war: sie machte ihn zum Betrüger. (S.883)

グリーシャは自身の自由な空想の世界から引き離され，割り当てられた役割を遂行するだけの存在になってしまったのである。グリーシャが死体になってから仮面をつけられたのは象徴的と思われる。

与えられた役割遂行だけのいわば機能人間は，自由意志，自由な精神活動という人間の理念からすると，モノの様相を帯びずにはいない。

4．敗残者

「病気」の項で舞踏病患者について触れたが，あの断章の始めの方に次のようなくだりがある。

es war wieder etwas da, das mich nahm wie Papier, mich zusammenknüllte und fortwarf, es war etwas Unerhörtes da. (S.768)

こう前置きしてマルテは，自分を紙のように丸めて投げ捨てたある出来事，つまり舞踏病患者の一件を語り始める。そしてこの章の終わりで再び，この出来事のために自分が紙のようになったと繰り返す。

ich war leer. Wie ein leeres Papier trieb ich an den Häusern entlang, den Boulevard wieder hinauf. (S.774)

これらのくだりは，fortwerfenされた者，すなわちFortgeworfene（敗残者）を理解するうえで役に立つだろう。

このいくつか前の断章第16にFortgeworfeneはすでに登場している。

Denn das ist mir klar, daβ das die Fortgeworfenen sind, nicht nur Bettler; nein, es sind eigentlich keine Bettler, man muβ Unterschiede machen. Es sind Abfälle, Schalen von Menschen, die das Schicksal ausgespieen hat. Feucht vom Speichel des Schicksals kleben sie an einer Mauer, an einer Laterne, an einer Plakatsäule, oder sie rinnen langsam die Gasse herunter mit einer dunklen, schmutzigen Spur hinter sich her. (S.743)

モノのように投げ捨てられ，都会の片隅に植物のように棲息する人々。マルテは自分が彼らの同類になりかかっていると知っている。FortgeworfeneはBettlerではない。Bettlerならbettelnという行為をする人だからだ。Fortgworfeneは何かをする，あるいはしないためにそう呼ばれるのではない。彼らは自分の意志ではなく他者の意志によって投げ捨てられた人々なのである。運命が吐き出したゴミであり，人間の剝かれて捨てられるべき外皮である。運命がここでは擬人化されている。人間はそれに翻弄される存在にすぎない。運命の唾に濡れて，その吐き出されたものは壁に街灯に広告塔にへばりつく。あるいは，それらは黒い汚らしいしみを後に残しながら通りを流れ落ちていく。このような存在が敗残者

なのだ。

Sie sind da und wieder fort, hingestellt und weggenommen wie Bleisoldaten. (S.780)

並べられ，片づけられる鉛の兵隊のような敗残者たち。

彼らの一人が公園で小鳥に餌をやる様子をマルテは断章第25で書いている。

Wie ein Leuchter steht er da, der ausbrennt, und leuchtet mit dem Rest von Docht und ist ganz warm davon und hat sich nie gerührt. (S.781)

燃えつきようとするロウソクのようにその男は立っている。すなわち，その男の立つ様子はロウソクを思わせるといっているのであるが，しかしここにはおとしめるような響きは感じられないように思う。数行後では，同じ男が今度は人形にたとえられる。

Was sollte sie auch erwarten, diese alte, verregnete Puppe, die ein wenig schräg in der Erde steckt wie die Schiffsfiguren in den kleinen Gärten zuhause; (S.782)

ここでもまた，モノへの見立ては人間性をおとしめるものではないだろう。このような表現は，マルテがモノ的在り方の強みを予感していたからこそではないだろうか。

断章第59では盲目の新聞売りのことが述べられる。この男も明らかにFortgeworfeneである。

Er macht sich so flach, daß täglich viele vorübergehen, die ihn nie gesehen haben. Zwar hat er noch einen Rest von Stimme in sich und mahnt; aber das ist nicht anders als ein Geräusch in einer Lampe oder im Ofen oder wenn es in eigentümlichen Abständen in einer Grotte tropft. Und die Welt ist so eingerichtet, daß es Menschen giebt, die ihr ganzes Leben lang in der Pause vorbeikommen, wenn er, lautloser als alles was sich bewegt, weiter rückt wie ein Zeiger, wie eines Zeigers Schatten, wie die Zeit. (S.899f.)

この男は公園の柵のところで新聞を売っているのだが，売る新聞も何部も持っていないようであり，その呼び声も小さくてかすかな物音みたいである。彼の動きはあらゆるものにましてひっそりとしていて，時計の針の動き，いや時の動きそのものだと，マルテは思う。実のところマルテはこの男を直視することができなかった。マルテは見ることを避け，この男の姿を想像する。想像の中で男の姿はとてつもなく悲惨なものとなり，マルテは今度はそれを現実の姿で薄めようと公園へ出かけていく。のんびりと快い春の日曜日だった。マルテは男の姿を見つける。現実のその男はマルテの想像を越えていた。マルテは自分の想像力が現実のこの男の悲惨に及びもつかなかったと知る。しかし同時に，この男が悲惨なだけの存在ではないことも見てとる。盲目の男は，黄と紫のネクタイをし，緑のリボンのついた新しい麦藁帽子をかぶっていたのだ。マルテはこの装いに，神の存在証明を感じてハッとする。

Mein Gott, fiel es mir mit Ungestüm ein, so bist du also. Es giebt Beweise für deine Existenz. (...) Dieses ist dein Geschmack, hier hast du Wohlgefallen. Daß wir doch lernten, vor allem aushalten und nicht urteilen. Welche sind die schweren Dinge? Welche

die gnädigen? Du allein weiβt es. (S.903)

だがこのように投げ捨てられた悲惨な人間の中に神の存在証明を見たものの，マルテは自分は同じようには生きられないと思う（断章第60）。

Nein, es ist nicht, daβ ich mich von ihnen unterscheiden will; aber ich überhübe mich, wollte ich ihnen gleich sein. Ich bin es nicht. Ich hätte weder ihre Stärke noch ihr Maβ. Ich ernähre mich, und so bin ich von Mahlzeit zu Mahlzeit, völlig geheimnislos; sie aber erhalten sich fast wie Ewige. Sie stehen an ihren täglichen Ecken, auch im November, und schreien nicht vor Winter. Der Nebel kommt und macht sie undeutlich und ungewiβ: sie sind gleichwohl. Ich war verreist, ich war krank, vieles ist mir vergangen: sie aber sind nicht gestorben. (S.903f.)

マルテは彼らのように強くもないし大きくもないのだ。彼らの強さとは，一種モノじみた不変性であろう。毎日同じ所に立ち，冬の寒さにおびえもしない。それに対してマルテは，旅に出たり，病気になったり，多くのものを失ったりと，人間らしい活動をし，人間らしい落下を経験せずにはいない。

Diese Stadt ist voll von solchen, die langsam zu ihnen hinabgleiten. (S.904)

だが彼らもまた最初からそのようだったのではないのだ。次第に落ちていったのである。マルテはすべり落ちていく娘たちのことを書く。

diese Puppen, mit denen das Leben gespielt hat, (S.905)

人生にもてあそばれた人形のような娘たちは期待を裏ぎられ続けて落ちていく。

Sie sind nie sehr hoch von einer Hoffnung gefallen, so sind sie nicht zerbrochen; aber abgeschlagen sind sie und schon dem Leben zu schlecht. (S.905)

希望がそう高いものではないから，彼女らは落ちても砕けちりはしないが，ガダガタになり「生きる」ためには傷みすぎてしまうのだ。

Ich glaube, nur Jesus ertrüge sie, der noch das Auferstehen in allen Gliedern hat; aber ihm liegt nichts an ihnen. Nur die Liebenden verführen ihm, nicht die, die warten mit einem kleinen Talent zur Geliebten wie mit einer kalten Lampe. (S.905)

たがマルテにはわかっているのだ。これらの娘たちを支えられるのはキリストだけであると。しかしキリストは彼女らを顧みないであろうことも。なぜなら，これらの娘たちには愛される才能しかないから（それさえも消えかけている）。そしてキリストを誘惑するのは，愛する女だけであるのだから。

5．愛

愛もまた『マルテの手記』の大きなテーマの一つである。このテーマも，意志の問題と深く絡めて扱われているように思われる。マルテは能動的な愛を行なう人，すなわち愛する人（Liebende）を評価し，受動的に愛を受ける人，すなわち愛される人（Geliebte）を評

価しない。マルテは愛を作業・仕事だとして，LiebeとArbeitとを結びつけた表現を何度も使っている(＊10)。愛にとって意味があるのは，愛されるという受け身の状態ではなく，愛するという能動行為なのである。

断章第66は次のように始まる。

Schlecht leben die Geliebten und in Gefahr. Ach, daß sie sich überstünden und Liebende würden. Um die Liebenden ist lauter Sicherheit. (S.924)

愛される者はその受け身性のゆえに危うい。「愛する」がまさに人間らしい能動行為であるのに対し(＊11)，愛の対象となることは意志のないモノでも可能である。ただし，だからといって，愛の対象がその愛によって何の影響も受けないということにはならないのはいうまでもない。愛は，暴力的（gewaltig）なものでもある。マルテは愛された者として後に残された者を，空っぽの宝石箱にたとえる。その内部はビロードが色あせ，へこみが残っている。そんな空虚さを，マルテはほんの一瞬しか耐えられないほどの恐ろしさと述べるのだ。

しかし，この愛された者たちが一転して，愛する者に変わると，彼女らはかつて自分を愛した者たちを越え出てしまう。

Sie stürzen sich dem Verlorenen nach, aber schon mit den ersten Schritten überholen sie ihn, und vor ihnen ist nur noch Gott. (S.924)

例えば，あのポルトガルの女マリアンナ・アルコフォラード，それからガスパラ・スタンパ。彼女らの愛は相手の男を越え出てしまう。

Immer übertrifft die Liebende den Geliebten, weil das Leben größer ist als das Schicksal. Ihre Hingabe will unermeßlich sein: dies ist ihr Glück. Das namenlose Leid ihrer Liebe aber ist immer dieses gewesen: daß von ihr verlangt wird, diese Hingabe zu beschränken. (S.899)

このようなdie gewaltigen Liebenden (S.833) の愛はもはや生身の男が耐えられるようなものではない(＊12)。

断章第68では，古代ギリシアの女流詩人サフォーが，愛される者たちを愛する者に変える者として述べられている。

Wenn sie (＝Sappho) es verachtete, daß von Zweien einer der Liebende sei und einer Geliebter, und die schwachen Geliebten, die sie sich zum Lager trug, an sich zu Liebenden glühte, die sie verließen. (S.930)

乙女たちが，愛する者になって，彼らの配偶者に対するに神に対するように自制し，さらには夫たちの輝きをも克服するようにとサフォーは願うのである。

このようにマルテにとっての愛の概念には，先にも少し触れたが，暴力を思わせるところがある。だから愛の対象（客体）になるのは恐怖である。断章第70では，アベローネの愛，神への愛が語られる。

Manchmal früher fragte ich mich, warum Abelone die Kalorien ihres großartigen Gefühls nicht an Gott wandte. Ich weiß, sie sehnte sich, ihrer Liebe alles Transitive zu nehmen, aber konnte ihr wahrhaftiges Herz sich darüber täuschen, daß Gott nur eine Richtung der Liebe ist, kein Liebesgegenstand? (S.937)

愛するのであり，決して愛されないこと，愛を返されないこと(＊13)。なぜなら

Geliebtsein heißt aufbrennen. Lieben ist: Leuchten mit unerschöpflichem Öle. Geliebtwerden ist vergehen, Lieben ist dauern. (S.937)

こうして，最後の断章が始まる。

Man wird mich schwer davon überzeugen, daß die Geschichte des verlorenen Sohnes nicht die Legende dessen ist, der nicht geliebt werden wollte. (S.938)

マルテは，聖書の蕩児の物語を愛されることから逃げ出した若者の伝説だとする。その者は愛にはぐくまれて子供時代を過ごし，愛されるとは愛する者から束縛を受けることと悟り，家を出る(＊14)。

Viel später erst wird ihm klar werden, wie sehr er sich damals vornahm, niemals zu lieben, um keinen in die entsetzliche Lage zu bringen, geliebt zu sein. (S.941)

だが彼は孤独のうちで再三愛してしまう。しかしその際にも，相手の自由を束縛しないようにとは深く気を配るのである。次第に彼は，対象を焼きつくすのではなく，照らし出す愛を知るようになる。そして，自分自身も，そのようになら愛されたいと思う。だがその思いは満たされない。彼をそのように愛してくれる者が見つからない。彼は例えば羊飼いとなって世界を巡る。そんな中で，神への愛が始まる。静かで際限のない仕事が。

ich sehe sein Dasein, das damals die lange Liebe zu Gott begann, die stille, ziellose Arbeit. (S.943)

彼は今まで自分が手に入れていたと思っていた愛は，おろそかで取るに足りない愛であったと考えるようになる。彼は空白の子供時代をやり直すために，故郷に戻った。故郷は昔通りの愛をもって彼を迎えるが，だが彼は今や愛されにくい者となっているのである。彼は唯一人だけが彼を愛せるのを感じるが，その者はまだ彼を愛そうとしない。

Er war jetzt furchtbar schwer zu lieben, und er fühlte, daß nur Einer dazu imstande sei. Der aber wollte noch nicht. (S.946)

手記はここで終わる。

Ⅲ. 意志の力とその限界の彼方

『マルテの手記』を読んで私の目を引いたのは，随所に見られる擬人表現と擬物表現だった。読み進めるうちに次第にそれらの表現がテーマと深くかかわり，テーマを支えていると強く思うようになった。主張の内容を，その主張の仕方が支えているのである。

リルケ，そして彼の創った人物マルテも，一見なよなよとしているが，少し目をこらせば彼らの意志の強さは明らかである。彼らは，人間にとって自由意志ほど大切なものはないと考えていたにちがいない。ベニスについて書く断章第69で，この観光客にとっては華麗であるばかりの都市を，意志の結晶の都としてマルテは讃えている。

Das weiche, opiatische Venedig ihrer Vorurteile und Bedürfnisse verschwindet mit diesen somnolenten Ausländern, und eines Morgens ist das andere da, das wirkliche, wache, bis zum Zerspringen spröde, durchaus nicht erträumte: das mitten im Nichts auf versenkten Wäldern gewollte, erzwungene und endlich so durch und durch vorhandene Venedig. (S.932)

無のただ中に意図され造り上げられ，今ではあくまで存在を主張する町，ベニス。『マルテの手記』のテーマ――愛・女性・死・都会など――はすべてこの意志の問題と絡めて書かれているように思えるのだ。その際に意志の有無が人間にふさわしい行為とそうでないものを分ける規準になっている。すなわちヒトとモノとの分かれ目となっている。その境界領域で擬人表現・擬物表現が生じる。つまり人間なのに意志を欠いたり意志を尊重されないものは，あたかもモノであるかのように表現される。逆に，意志のない存在や現象でも，あたかも意志あるごとく振る舞うかのように認識されれば，本来人間の行為のために用意された語彙が使用される。つまり擬人表現となる。

さて，擬人表現が頻繁に使われるジャンルというなら，メルヘンであろう。そこでは歌う花やことばをしゃべる動物は珍しくもない。『マルテの手記』にも，このような擬人表現がある。例えば断章第11で，

Einzelne Blumen in den langen Beeten standen auf und sagten: Rot, mit einer erschrockenen Stimme. (S.722)

花がびっくりしたような声で「赤」といったり，あるいは，

Er (＝ein sehr groβer, schlanker Mann) konnte ein Lächeln der Freude nicht unterdrücken und lächelte, an allem vorbei, der Sonne, den Bäumen zu. (S.722)

一人の背高のっぽの男が，太陽や花に向かってあたかも同胞に対するかのように微笑みかける。ここではヒトとモノとが同じ面に立って対等の交流をしているといえるだろう。

しかし，このようなケースは『マルテの手記』においては例外的である。マルテはあくまでも「意志」に人間性を見ているので，意志を持たぬ存在は人間より下位に位置づけられる。従って人間も意志を欠けば，おとしめられたものとして映るのである。逆に，モノが自律的な行為をすれば，今度は意志を持つ不気味なものとして立ち現れてくる。ヒトとモノとはあくまでも上下関係であり，両者が同じ平面で対等の交流をするというのは，マルテの考えにはなじまない。

しかしそれもまた次第に変わってくる気配は読みとれるのである。というよりこの作品全体が，人間の意志を何よりも重視する近代の理念からの脱却の物語ともいえるように思

う。本稿第Ⅱ章4で紹介した，盲目の新聞売りの姿。意志という観点からいえば，この男は明らかに惨めな状態にあるだろう。都会の底辺にうごめくというのか，植物のように棲息する（dahinvegetieren）存在である。ところがこの男がある日，春の訪れを喜ぶかのように装うのだ。緑のリボンのついた新しい麦藁帽子に，黄と紫の市松模様のネクタイをつけて。自分ならあんな惨めな状態ではとても生きられないと思うような相手が，この世に在ることを嬉しそうにしている！ 誰かに保護されなければ一日とて生き延びられないような幼い子供の無邪気さを思わせる姿である。この男には保護者がいるのだろうか？ いなければあんなふうにはなれないはずなのだ。自分の意志を頼りに生きるのではなく，生かされているという受け身的在り方を喜ぶこと，マルテはそれに気づいたのだと思う。断章第59のこの新聞売りだけではない。断章第25の小鳥に餌をやる人。あるいは，

Sie haben schon angefangen, sich umzusehen, zu suchen; sie, deren Stärke immer darin bestanden hat, gefunden zu werden. (S.832)

と断章第39で述べられている昔の娘たちの姿に，彼は受け身の強み，モノ的在り方の強みを予感しているように思われるのだ。

断章第18の最後には，旧約聖書『ヨブ記』からの引用がある。ヨブこそはまさに意志をないがしろにされ，モノのように翻弄された人である。

ヒト－モノ関係が，ヒトがモノを支配するという上下関係であるとするならば，ヒトをモノのように支配するのは何か？ 私たちはそれこそをカミと名づけているのではないか？ カミ－ヒト関係は，ヒト－モノ関係と相似である。カミの前ではヒトはモノ的存在になってしまう。しかしそのようになってこそ，子供のようには保護者を持てないおとなが，意志の及ばない世界で無邪気に生きられるのではないだろうか。

Er war jetzt furchtbar schwer zu lieben, und er fühlte, daß nur Einer dazu imstande sei. Der aber wollte nocht nicht. (S.946)

『マルテの手記』のこの終わり方は，マルテがこのことを予感していたと思わせずにはいない。しかし同時にまだそれが予感の段階にとどまっていたことも感じさせるのである。

註

本稿は日本独文学会北陸支部第18回研究発表会（1991年11月2日）での発表に加筆したものである。

使用テキスト：Rainer Maria Rilke, Sämtliche Werke in zwölf Bänden, hg. vom Rilke-Archiv in Verbindung mit Ruth Sieber-Rilke, besorgt durch Ernst Zinn. Bd. XI, 6.－10. Tausend, Frankfurt a.M. 1976.

(1) 奴隷や農奴といった人間の在り方を思えば，これが事実ではなく理念であることは明白である。例えばオルテガのことばを借りれば次のようになる。「あらゆる時代の「民衆」にとって，「生」とは何より

もまず制約，義務，隷属を，一言で言えば，圧力を意味してきた。」（『大衆の反逆』桑名一博訳，「オルテガ著作集」第2巻所収，白水社1969年，104頁）「つまり，新しい人間にとって，生はあらゆる基本的な面において自由自在と見えたのだ。それ以前の庶民には，こうした生の自由がぜんぜんなかったことを思い起こせば，この事実が影響を及ぼす範囲とその重要さとは自然に明らかになってくる。それ以前の庶民にとっては，生とは経済的にも肉体的にも窮屈な運命であった。」（同書103頁）

(2) そもそもモノ視・モノ扱いされるのは，人間のコントロール可能な存在である。人類の技術力の向上によってこのコントロール可能範囲が拡大するのにともない，呪術や祈願の対象であるカミの領域は狭まった。人間が何をしようとびくともしない自然，それゆえ信仰の対象にもなる自然を，20世紀末の私たちは持ちにくくなっている。自然はいまや人間の支配下に入り，さらには人間が保護してやらなければならない弱い存在になってしまったかのように扱われることも珍しくない。

(3) 瀬戸賢一著『レトリックの知――意味のアルケオロジーを求めて』新曜社1988年，38頁参照。

(4) 同上。

(5) ヒトにとっても，自分の誕生ばかりは絶対に意志のままにできないものであるが，「生む」の受動態である「生まれる」に私たちは受け身をほとんど感じない。

(6) Karl Ludwig Schneider: Der bildhafte Ausdruck in den Dichtungen Georg Heyms, Georg Trakls und Ernst Stadlers. Heidelberg 1954, S.14f.

(7) A.a.O., S.16.

(8) この場合は「擬神化」というべきなのだろうか。しかし，神という概念自体，特に人格神という考え方には，擬人法的発想が感じられないだろうか。

(9) 外から見られるものの象徴的存在としてのGesicht。比喩的使い方では，例えばある有名アナウンサーを指して「NHKの顔」といったりする。

(10) 例えば，断章第39（S.833），第40（S.834），第71（S.943f.）。

(11) 犬の愛，羊の愛というものも『マルテ』に見られるが，それらは人間の愛よりも弱いものとされている。例えば断章第71では，羊の低い愛なら重荷にはならなかった，と書いている（S.942）。

(12) リルケはマリアンナ・アルコフォラードの手紙について“Die fünf Briefe der Nonne Marianna Alcoforado”（使用テキストの999～1002頁に所収）というエッセイを書いているが，その中でこのような愛の過激さや，対象を越えてしまう様子を次のように述べている。Wir ahnten es zwar, doch ist es uns niemals vielleicht so deutlich aufgezeigt worden, daß das Wesen der Liebe nicht im Gemeinsamen läge, sondern darin, daß einer den andern zwingt, etwas zu werden, unendlich viel zu werden, das Äußerste zu werden wozu seine Kräfte reichen. (...) Ihr (=Mariannas) Schmerz wird ungeheuer; aber ihre Liebe wächst noch über ihn hinaus: sie ist nicht mehr zu halten. Und schließlich schreibt Marianna dem Geliebten von ihr: “sie hängt nicht mehr davon ab, wie du mich behandelst”. ガスパラ・スタンパは『深淵』という詩で次のようにうたっている。Wär Deinem innern Blick zu schaun beschieden, ／ das Heimlichste in meines Herzens Grunde, ／ (...) ／ Du sähest eine Hölle ohne Frieden ／ in einem abgründigen Schmerzensschlunde, ／ wo Eifersucht und Ängste Stund um Stunde ／ im ewgen Brande meiner Liebe sieden. ／ Du sähst Dich selbst auf einem Throne prangen ／ inmitten meiner Seele: keine Pein ／ kann Dich von dort verdrängen und kein Schrecken. (in: Italienische Gedichte. Deutsche Nachdichtung von Bruno Goetz. Zürich 1953)

(13) 断章第57でベティーネの愛について次のように書かれている。Solche Liebe bedarf keiner Erwiderung, sie hat Lockruf und Antwort in sich; sie erhört sich selbst. (S.898)

(14) この若者は自ら家を出るのである。そして汚穢にまみれた生活をするが，それは Fortgeworfene の場合と異なり，自らの意志によるものなのである。その意味においてこの蕩児は，敗残者の否定の一形態と見なすこともできるだろう。